

## 大学らしい体育を求めて 生涯学習社会における大学体育の水準を考える

阿部一佳, 高橋伍郎, 嗟峨 寿

What is a University Physical Education?  
To teach UPE appropriate to University Education  
in a society of learning for long-life

ABE Kazuyoshi, TAKAHASHI Goroh, SAGA Hitoshi

はじめに

私達は、この小論において二つの課題について論述を試みるつもりである。一つは「大学における体育とは」という問いに一つの視点から答えることであり、もう一つは、それらの教育実践をどのようにレポートするか、という課題に取り組むことである。二つの課題に意味的な関係はなく、問題の成立する地平も同じではない。しかし、教育評価において双方の課題は出会う。そこで、ここでは一つの教育実践例とそのレポートのあり方を出来るだけ一般化して論じてみたい。

### 1. 大学における一般体育の課題を考える

小中高等学校段階での体育の中心課題は、健全な身体の発達にある。各種の運動・トレーニングを通してスポーツに対する関心・態度・技能を育成し、それらの習慣を形成させることで、健全な身体を発達させ、もって優れた生活に動機づけることを狙うことであり、その視座は生涯スポーツ概念に置かれている。こうした体育概念を受けて、本学の一般体育

の目標も、およそこの意味合いの範疇の中で設定されている。しかし、敢えて言うなら、平成3年度から移行処置に入った大学改革の体育への問いは、具体性を欠くものではあっても、こうした従来の形式を敷衍した一般体育のあり方に、総じて否定的な評価を下したことに注目しなければならないだろう。

大学における一般体育が否定された原因の一つは、その学習内容とするところのスポーツが、既に大学の一般体育の枠を大きく越えて、時代的・世界的な意味を担っているからであった。即ち、私達のスポーツへの関わりは、単にプレーするという意味での performer としての能力を保持することでは収まらなくなってきていたのである。例えば、座学に対するアンチな体育の意義だとか、人間が個々に分断されていく近代の諸傾向に対するカウンター・カルチャーとして、分断された人の存在性を回復させる基盤としての身体の復権を提唱するというような、いわば体育の特性を「体育の内部にいる者が内部の論理で求めていくような、閉じられた思考法」でスポー

ツを捉えることの限界が、多くの人々の目に露呈されてきていたのである。社会の中で見られるスポーツは、様々なメディアや商品、イベントなどを媒介にして、生活のあらゆる場面に浸透してきており、私達はスポーツに単に performer としてだけ関わるわけにはいなくなってきた。今やスポーツという文化は、全ての人々の様々な生き方と関わりを持つようになってきていたのである。私達は、'スポーツする'と共に'スポーツを見る'のであり、さらには'スポーツをイベントとして企画し主催する' 'スポーツを教え・その相手をする(相手を務める)'ように、他人とスポーツを出会わせる役割をも果たすようになってきていたのである。

単に多様な関わり方を求めるのであれば、集団訓練やチーム・ゲームを通じて、既に小中高等学校までの体育の学習においてもそうした能力は習得されていると見てもよいだろう。ここで問題になるのは、こうした多様なスポーツへの関わり方の'質'の問題である。決して小中高等学校の体育の質が悪いというのではない。できることならば、こうした関わりが'スポーツの固有価値'に動機づいていくものであって欲しいのである。'固有価値'とは、「享受能力のある人間」がこれと出会うことによって、これを有効価値に変えていくことの出来るものである。この'スポーツの固有価値'に動機づけるために、私達は大学における教養、言い換えるならある水準の学識を必要とする。ここに大学体育が存立する重要な地平がある。

こうした文化と生活の次元を結んで、その関わり方の質を問うた人に、19世紀末の英国の、ジョン・ラスキンがいる。ラスキンは、文化と関わる人々の基本様態を'クリエイター' 'オウディエンス' 'コーディネイター'の三つに分けて、一人ひとりの人間がいずれの様態においても文化の'固有価値'に向うことの出来る能力を形成・強化しなければならないと

考えた。これらの能力が育成されることが、近代人に求められる'教養'であり、このような教養を有する人々によって形成された社会の状態を'文化'だとしたのである。このことを大学体育の文脈に載せて書き直してみよう。即ち、

「大学体育の目標は、学生が'スポーツの固有価値'を学んでこれに気づき、生涯に亘ってプレーヤーとしてスポーツに参加し、創造的な活動を行う能力を養うとともに、スポーツの観戦においては優れたスペクテーターとして、優れた批判精神を保持し、スポーツのよき理解者となる資質を育てること。さらに優れた企画者・指導者・紹介者として人々をスポーツ・イベントに出会わせ得る能力を習得すること、である。」

とすることが出来るだろう。

私達は、スポーツに関わる高度な態度の育成において、こうした三つの基本的な課題をどのように受け止め、具体化していけばよいのだろうか。

## 2. 大学体育における三つの課題を解釈する

ところで、一般に'価値'は、経済学の中心的概念である。特に'交換価値'というのはある商品がどれだけの貨幣額と交換されるかを示す経済学の基本概念であったが、ラスキンはこれを経済学の中心に置くことに批判的であった。彼は「ものの'価値'は、交換される貨幣額によって決まるのではなく、'生きていくこと'の充実に向けてどれだけ貢献できるかという'本物'の性質に由来する」と考え、こうした価値を'固有価値'と呼んだ。

こうした考え方は、私達が自分の人生において「スポーツの持つ意味とどのように出会うべきか」を考える視点としても有効であると思われる。したがって、'スポーツの固有価値

値'に動機づけるということは'本物のスポーツ'に動機づけることであり、つまりは'スポーツの本質'に気付かせそこに向かわせてやることだということになるだろう。すると、私達はどのような契機で、'スポーツの本質'に出会い、そのことに気づき、なおかつそこに向けて動機づけられていくことになるのか、それが問題になる。

したがって、ここで求められているものは、一人ひとりの'教養'を高めていこうとすることと同じものを求めていることが分かる。一般的に言って、人はこうした契機を'文化'の中においてキャッチすると考えるのが妥当であろう。こうして'教養'と'文化'の相補的な関係が見えてくる。体育の問題が、一つに'身体'へ収束していく思考法だけでは捉えきれないことが分かる所以である。

かつて、スポーツは performer それ自身に体験される performance であった。それが gym や studium で行われるようになって、perform する者と witness する者の緊張の中に意味付くものともなり、'スポーツの本質'は次元的な構造を有するものとなった。少なくともここまでは、スポーツは、それを perform するにせよ witness するにせよ、perform した者と witness した者の、直接的な経験の次元内の出来事であった。これらが新聞や雑誌のような mediate する物によって報じられ、記録されるようになって、'スポーツの本質'は、絵や図と文字によって時空間を延長された、新しい意味の展開を付与されたことになる。'スポーツの本質'に直接的な契機と間接的な契機が構造化され、付与されたのである。ここで'本質'が変わるのは、おかしいと考える人がいるかもしれない。'本質'とは元来不変なものであって、それが変わるというのであれば、言葉の意味において不合理だと考えられるからである。しかし、次のように考えることは出来るだろう。本質は、常に全て見えているもの

ではなく、文化の状況が変われば見え方、つまり意味も変わって新たに見えてくるものだと。

こうした構造化による意味の拡大は、まずは radio, telephone という音声メディアの出現や録音技術の進歩によって、さらには通信技術の出現によって、いっそう促進されてきた。直接的であることと間接的であることの意味の組み合わせが、時間と空間の関係に限っていても、計り知れない程の複雑さを持つようになったのである。これを裏返して言えば、この経験の意味の複雑なマトリックスの中で、私達はそれだけスポーツの教育の多様な可能性を与えられていることに気付くだろう。

1960年代に入って、私達はさらに新しいメディアである television 関連機構の出現を得て、スポーツに関わることの、いっそう複雑な構造化を与えられることになった。スポーツと出会い・スポーツを経験する多様な機会の出現は、私達がスポーツをプレイし、クリエイトする接点・対象・機会を拡大し、〈オウディエンス(みる者)であること〉〈これを読む者であること〉〈これを聴く者であること〉などの意味を深化させ、コーディネイトすることの意味と可能性を無際限に広げてくれた。スポーツを経験するということが、スポーツに関わるということは、このような広がりに向けて参加することであり、そのいずれにも'スポーツの本質'と出会う機会が期待できるのである。

私達は、こうした時代について、スポーツの本質に向けて学生を動機づけ、これに向かわせる無尽蔵な可能性を既に与えられていると考えた方がよいだろう。スポーツとの出会いの多様な接点・対象・機会のいずれもが、教養と文化の相補的な関係の中に生起することは既に述べた。仮に'スポーツの本質'に向かう過程を巨大で複雑な迷路遊びに例えたと

しても、入り口からゴールに向かう道は決して一本ではない。優れた教養も、優れた文化も、この迷路の中に、数知れないゴールに至る道を拓いてくれることだろう。迷路の中の行方を遮る壁は、或る力によっていくらかも可動になる。そうなることが遊び (ludus) の本質であり、文化というものなのであって、壁を動かす力は教養に由来する。

### 3. スポーツを〈プレイすること〉とくみること〉の具体的な展開について

#### 3-1. 第1部：〈プレイすること〉の本質を考える

##### 3-1-1. 一例としての高橋の水泳指導プログラムをみる

私達は、大学らしい体育の具体的なモデルを、高橋によってプログラムされたバタフライ泳法に求めてこれを一つの例とし、その指導法を考察の対象にした。高橋はどの泳法を入り口にしても水泳の本質に至れることを身をもって指導してきた希有な指導者であると言えるだろう。一般に習得が最も難しいとされるバタフライ泳法においてさえ、これを入り口として泳ぐことの本質に触れることができる。と彼は考え、そのことを実践してきた。本節ではその指導過程を吟味しながら、どこに泳ぐことの本質に迫る要因があるのかを解釈し、この解釈からスポーツを〈プレイすること〉の本質の一端を演繹してみたい。

高橋のバタフライ泳法指導の概要は、バタフライ誕生までの段階をモデルとして、次のようにプログラムされている。

- 1) 水の中での立ち方：背面浮きの方法から立ち方へ
- 2) 毛虫段階：手のひらと足の甲で水を同時にドボン・ドボンと打つ。水面近くで手足が十分に曲げ伸ばしされていればよい。(これが出来た段階で、90%以

上バタフライが出来たと認識させることが大切)

- 3) さなぎ段階：次の羽化の段階に進むために、毛虫泳ぎよりもスムーズにしかも楽に浮いたり・沈んだりしながら、手首だけを水面上に出してみ、かきやけりに応じた反作用や浮き・沈みのタイミングを掴んでいく。(水面上に手を出す前に水をスイープ sweep するような動作を試みる)
- 4) 蝶々段階：腕の下方外側へのかきと身体の浮き上がりをマッチングさせながら、徐々に羽ばたいていく。毛虫段階のドボン・ドボンのリズムはバタフライになっても全く変わらない。身体全体の浮き上がりの結果、腕の空中へのリカバリーができるという発想が大切である。バタフライのタイミングに着目して、楽に練習を行い、結果的に練習回数を多くして上手になろうというのが大きな狙いである。

高橋はこのプログラムの展開に当たって、バタフライがアルキメデスの「浮体について」の命題3・4・6・7、公準1を満たすものであるとして、特にこれらを講義し、「我々が水中で泳ぐことが出来るのは、手足を一生懸命にかいたり、けったりするからだと思いがちだが、水中でゆったりと楽に泳ごうとする時には、その力の90%以上は水から受ける浮力という自然の力の働きによるものであることを知る。」と説き、「この浮力の存在は、2000年以上も前にアルキメデスによって明らかにされたものであるが、実際の泳ぐ場面で本当によく理解されているとは言いがたい。」として「授業はスポーツしながら科学をすることだ」と語りかけている。

では、高橋の言うように「授業はスポーツをしながら科学をすることだ」とするならば、泳ぐことが科学することであることを自覚し

たとき、スポーツの本質に触れたことになるのだろうか。アルキメデスの「浮体について」の【公準1】は次のように書かれている。ここで、公準1の他にバタフライ泳法に関係すると高橋が考えた命題3・4・6・7も見ながら、バタフライ泳を通して「スポーツの本質」というものが、どのような意味を持つものであるのかを考えてみたい。

【公準1】液体とは、次のような本性のものと前提する。すなわち、その部分が平らに横たわり、かつ連続しているために、より少なく押しつけられている部分はより多く押しつけられている部分によって押されるもの、また何らかの容器の中に閉じ込められたり、ほかのなんらかのものに圧されたりしないかぎり、液体のおおのこの部分はその垂直上方にある液体によって押しつけられているものである、と。

【命題3】一つの立体が、それに等しい容積、等しい重さ（したがって等しい比重）の液体の中に落とされると、液体に浸って、表面より上に突き出ることもなく、またいっそう下に沈むこともないであろう。

【命題4】液体よりも（比重の）軽いすべての立体は、液体の中に落とされると、まったく没してしまわずに、部分的に液体の表面上に突き出るのである。

【命題6】液体よりも（比重の）軽い立体が、液体の中に浸けられて表面に浮き上がる時、その立体を上方に押し上げる力は、等しい容量の液体の重さが立体の重さにまさる、その超過量に比例するであろう。

【命題7】液体よりも（比重の）重い立体は、液体の中に落とされると、底に沈

み、そして液体の中における立体の重さは、立体の容量に等しい容量の液体の重さだけ、本当の重さよりも軽くなるであろう。

（三田博雄訳「アルキメデスの科学」『世界の名著9 ギリシャの科学』中公パックス）

高橋は、泳ぐことを教えるとは、気づきを「力学的原理」から「人間のための原理」へ移すことだとして、人の水泳技術習熟に関する原理を以下のように三つ立て、この原理によって指導プログラムを構成している。

- (1) 人は生まれながらに泳げない
- (2) 学習によりすべての人は泳げるようになる
- (3) 技術の上達は学習時間に比例する

高橋によれば、「人は生まれながらに泳げない」のであるから、彼の授業に参加するすべての学生を、彼はまずプールで泳ぐのではなく、プール内の立てるところで立つこと、つまり呼吸を確保するための最も安全な方法の確認から導入する。人体の浮きと沈みの微妙な関係は、アルキメデスの原理〔 $B = \gamma V$ 、 $B$ ；人体の浮力、 $\gamma$ ；液体の比重量、 $V$ ；液体中の人体の体積〕が支配する関係であり、人の体重を  $W$  とした時  $W > B$  において人体は水面に浮き（命題4） $W < B$  において人体は水底に沈み（命題7）、 $W = B$  において人体は水中に漂う（命題3）。一方、人体の体重は陸上でも水中でも変わらないと考えられるから、水中にある人体がより大きな浮力を受けるためには、高橋は次の二点が重要だと考える。

- (1) 十分に息を吸って胸郭を拡げること
- (2) たっぷりと水に浸ること

こうした理解を通して、学生は「背面浮きから立ち方へ」の学習を経験する。元来背面浮きは、浮き方としてはよいが、立ち方として難しく、表面浮きは呼吸を継続して確保で

きないために浮き方としては悪く、立ち方としては容易だとされてきている。高橋はこのことを考慮しているのである。

さらに高橋は、「立ち方」のキーポイントが三つあるとして、1) 鼻から息を吐きながら、2) 思いきり顔を水面上に起こし、3) 腰を十分に曲げる(ゆっくり、前に回転して自然に足が真下に来るのを待つ)ことを強調し、この三点がよい浮き方に対応し、一方、悪い浮き方はよい立ち方である、としている。

これらの学習過程を通して学生の多くは、剛体としてモデル化出来る彼らの身体が、水との関わりの中で、1) 浮きながら出来るだけ回転を起こさずに静止できること、2) 前頭面内にある矢状面と直交する軸の周りで回転運動を起こすこと、この二つの相反する課題を自覚的にコントロールすることを習得することになる。この「背面浮きから立ち方へ」の学習は、当然「伏せ浮きから立ち方へ」の学習後に行う。これは、次の泳ぐ課題に向けた、重要な前提条件をなしているからである。「立てる深さのところ、確実に立つ」、これを心理的な表現に直すなら「立てる深さのところ、立たなければならなくなった時に、確実に立てる」ということになるのだろうが、この自覚は次の泳ぐ運動の課題に向けて、最も基本的な心的状態を与えるものとなるだろう。その意味は後で考える。

### 3-1-2. 高橋のプログラムからスポーツ くすることの固有価値を考える

以上、高橋のバタフライ指導のおよそのプログラム内容をみた。ここで、このプログラム全体が「水泳することの固有価値」ひいては「スポーツすることの固有価値」とどのように出会っているのかを考えてみたい。

高橋は、彼のプログラムの狙いが「力学的原理」を泳ぐ学習を通じて「人間のための原理」に変えることにあると言及している。

泳ぐために私達は水に浮き呼吸する。泳ぎ続けるためには、呼吸も続けなければならない。背面浮きでは連続して呼吸することが確保されるが、伏せて浮けば呼吸動作と共に身体の浮力は減少し、身体は沈みかける(胸郭が小さくなることと顔上げによる浮力減)。ここでは伏せ泳ぎを考えてみたい。

高橋は水中にある人体が大きな浮力を得るための条件を前述のように二つ挙げて、その内の一つは「たっぷりと水に浸ること」であるとしたが、水との関係を十分に体験していない者にとっては、「浸ること」は「沈む」と同じ意味が成立し、これは大きな不安の源となる。沈む身体をもう一度浮上させるには、身体の一部で水を押す運動を加えなければならない。この運動を加えながらうまく体勢をとることができれば、即ち巧く水面上に口を出すことが出来れば、吸気をすることができる。しかし、口を水面上に出すということは、顔の全体を水上に出すことであったり、首より上を水上に出すことであったりして、そのイメージは泳ごうとする者の水との関わりの経験の差異によって多様に拡散している。沈む不安と浮き出るイメージが相乗しあっているのである。

泳ぎと呼吸をマッチングさせるには、く息を吐く(呼気)=息を吸う(吸気)リズムをく身体が沈む=身体を浮かす)リズムに合わせる必要が出てくる。このことを達成するには、く沈み・浮く)水中の身体の変位の間に、ある種の運動 moves を加えて、く身体が沈む= moves=身体が浮く)一連の運動を構成する必要がある。高橋は、バタフライ泳法指導の始めに、このく浮上し=呼吸する)ための僅かな運動 moves を、手先と足先を使って水を打つ運動によって獲得しようとし、これを象徴的に「ドボン・ドボン」という擬音で導出しようとした。水の圧力、水の質感に抗して手先と足先を沈めようとすることで、浮力を獲得することが出来るからである。水面に口を

出すには、僅かな浮力で事足りるのである。手先や足先が水に抗するベクトルの方向は、時に水中の身体全体を何れかの方向に推進させることもあるだろう。なるほど、ここまでくれば、高橋がいうようにバタフライは90%出来たも同然である。「ドボン・ドボン」を強くすることで、うまく浮き上がることが出来れば、呼吸は確保される。

この手先・足先で「ドボン・ドボン」と水を叩く運動の強度が、ATP・CP系のエネルギー・エンジンや乳酸エンジンを動員する水準で行われたり、水中で横になる姿勢を維持するためにこの二つのエネルギー・エンジンが使われてしまえば、〈沈み=浮く〉運動リズムはどんどん速めていかなければならなくなって、水面上で口から酸素を摂取することで賄われる酸素系エンジンの出力は、到底追いつかないものになってしまう。バタフライ泳法の初期の導入段階において、「ドボン・ドボン」による浮上のための運動と酸素系エンジンの動員による呼吸の同調は、人が水中で生を維持するための必須の条件なのである。それ故に「ドボン・ドボン」は充分緩やかな自然の浮き沈みのリズムであることが望まれる。

〈呼吸=吸気〉リズムを〈身体が沈む=運動 moves=身体を浮かす〉リズムと同調させる、という問題の持つ意味を、もう少し掘り下げて考えてみよう。

呼吸の phase では身体の呼吸の分だけ胸郭の容量を縮小させて浮力を失い、たっぷり身体は水に浸かることになる。つまり、身体は沈んでいく。そこで、吸気のために身体を浮かせて鼻や口を水面に出すには、どうしても浮くという目的的な運動 moves を、意識的に遂行 perform しなければならなくなる。この沈みから浮くための運動遂行が一連の呼吸リズムに同調しなければ、水面に伏した姿勢の泳ぎは不可能になる。したがって、泳ぐという運動遂行のために目的的に浮くことと、呼吸を確保することは、記号と意味作用の関係

からなる言語構造のような構造関係を持つことになる。しかも、〈浮く運動〉と〈呼吸する運動〉は相補的な因と果の関係も有するため、言語構造的な関係モデルの中にあつて、能記と所記の交換可能な構造を有する特徴を持ってしまう。浮くことができなければ呼吸を確保できないのであり、呼吸できなければそれはまた、浮き上がれないのであつて、呼吸できるまでに浮き上がつてこないことになるのである。〈呼吸すること〉は〈浮く運動〉の意味作用・記号作用であり、〈浮く運動〉は〈呼吸すること〉の意味作用・記号作用にもなり得る。

初心者にあつては前述のようなイメージから、呼吸しようとして必要以上に浮く運動を激しく遂行してしまい、遂には運動の中で酸素負債を生じて、滑らかな運動の継続が不可能になるのである。〈呼吸の不成立〉〈浮き上がる運動の不成立〉は、単に運動の未遂行を結果するだけでなく、それは〈生きることの不成立〉つまり〈死〉をも意味する。

このように本来的な生物的死が、一回の〈浮き上がる運動の不成立〉と〈呼吸の不成立〉によって齎されるのであれば、〈浮き上がる運動の不成立〉と〈呼吸の不成立〉、それに〈生物的な死〉は三すくみの換喩の構造をなしていることになるのであつて、この換喩の構造こそがまた「泳ぐこと」の陰喩（メタファー）なのだといえるだろう。

したがって、泳ぐことの意味は、生物的な死を超えて、実存的に〈死～再生〉を連続的に経験することにあるということが出来る。こうして考えてみると、水泳による〈スポーツすることの固有価値〉の中核は、実存在的な〈死～再生〉の経験にあると言えるのではないだろうか。つまり、泳ぐという運動に含まれた先の二つのリズムの協調とは、〈生のリズム〉の本来的な現われ方のことであり、その達成は生の経験に他ならない。浮き・沈むり

ズムに随意運動である浮かうとする運動を加えて、呼吸のリズムと協調させるのであるから、沈みから意図して浮かうことができるようになった時に、performer は、泳ぐという一連の運動と意図の共感を達成していることになる。呼吸によって身体容量が減少し浮力が低下していく中で、浮かうと意図した一かきの運動で呼吸できるように浮上する時、身体容量が減少した分だけ抵抗なく水中を泳げるようになった運動の合目的性もまた実感されているはずである。その僅かな変化の実感のような水を捉えた感じこそが、泳ぎが達成された瞬間であり、その状態になって初めて泳ぎ手は〈生の実感〉〈生の共感〉を経験しているのである。高橋の言う「人間のための原理」の実感とは、この辺りにあるものようである。そこをもう少し考えてみよう。

### 3-1-3. 高橋の言う「人間のための原理」の意味を深めるためのプログラムを考える

それでは、前述のような運動の達成によって「人間のための原理」を実感できるのだろうか。また「人間のための原理」を実感できればそれは、直ちに大学体育としての課題を達成したいということになるのだろうか。高橋のプログラムは、大学生のレディネスを考慮して、「力学的な原理」を導入に配することで構成されていた。これが泳げたという達成の経験を契機にして「人間のための原理」に転換されているとするのでは、早計に過ぎるであろう。高橋は、泳ぎの技術や体力が高められていく中で、学生の認識や感情を高めるために、幾つかの副読教材を提供する。中心になるのは虫明呂臣無の『時さえ忘れて—スポーツ考現学』と中井正一の『美学入門—美学とは』である。この副教材が学生の意識に何を齎しているかを考えてみたい。

虫明の『スポーツ考現学』の趣旨は以下の

ようである。

「フランスの小学生は低学年から哲学を勉強し、人間が考えること・感じることを知っていく。特に感じる<sup>サンサシオン</sup>こと＝感受性の役割に目を向ける。食事のおいしさを知る、異性を美しい・凛々しいと感じることなどを通して、やがて自然の偉大さを知り、絵画・音楽の楽しさ、社会に果たす役割を知る。これがさらに人間の意志や美についての考え方、社会の理解の仕方・参加の仕方を知っていくことに繋がる。これが哲学なのだ。日本の教育では、感性が全く無視されてきた。しかし、感性に頼って生きていくことこそ教育の原点である。料理・音楽・服飾・スポーツなど肉体によって快さや美しさ、楽しさなどを感じるものの存在を知ることこそ教育の根本問題なのだ。虫明はスポーツを言語化することに賭けて、スポーツを哲学の手段にした。スポーツの中に絵画や音楽を成り立たせているものと同じものを発見するからである。スポーツは人間臭いもので、感性や思考にたくさんの影響を与えてくれる。スポーツが楽しいのは、それが人間の行為であり、人間の性格・心理・感性が複雑なように、スポーツも複雑な要素から成り立っているからである。」

「スポーツの愉しみは、体で自分を表現することである。同時に、スポーツを見る愉しみは、他人が体で表現した他人自身を読みとる愉しさ、である。その根底には、体を鍛える、生理を健全にする、思考を統一する、感情を清澄にする、という激しく、きびしい訓練があり、それぞれのスポーツ固有の技術的錬磨がある。この逆に技術—感情—思考—生理—体というコースを辿って自分なり、他人なり、の人間の全体像に辿り着いていく。全体をどのように理解するかというテーマである。人は普通言葉によって自分の感情や意志を表すが、画家は絵具によって、音楽家は音によって自分を表



すように、スポーツは自分の体によって自分を表す。これがスポーツする、スポーツを見る愉しさである。」

中井の『美学とは』の趣旨は、以下のようである。

「〈自然の中で〉人は価値あるものとして、真実であること・善良であること・美しく綺麗であることの三つを好み、尊敬し、愛する。真実であることを学ぶのが哲学・論理学、善良であることを学ぶのが倫理学、美しいことを学ぶのが美学である。しかし、真実であること・善良であること・美しく綺麗であることについて、自分でよく知っていると思っても、案外分かっていないものが多い。例えば自分の体の構造や働きがそうだ。なかなか自分の自由にはならない。

日常に思い悩み・立腹し・悲しみ・疲れた時、ふと自然を見る。すると、自然に包まれてうっとりその中に吸い込まれてしまっていることがある。何も意識していないのに、自分の体が自然と直接に響き渡っているのである。美に打たれる心持ちというのはこういうことではないか。自然の大きな秩序に包まれて、自分をそこにすっかり委ねてしまっている。無理にそうするのではないのに、自分の求めていたものが何であつたかがはっきり分かり、安らかさを感じ、のびのびとなり、気が開けていく。これを美の意識というのではないか。ドイツの詩人シルレルはこの自由な心を‘美しい魂 Schone Seele’と呼んだ。

〈技術の中に〉人間の技術が作り上げたものの、道具、建築、スポーツ等を美しいと思うのは、どんな意味を持っているのか。例えば、何百枚の写真を見てもクロールが分かるはずがない。長い練習のうちに、ある日、水に身をまかしたような、楽に浮いているような、力を抜いた心持ちで、泳いでいることに気付く。段々楽な快い、すらっとした心持ちが沸いてきて、フォームがわ

かったのである。それが美しい心持ち、美感に他ならない。自分の肉体が、一つのあべき法則、一つの形式（フォーム）を探り当てたのである。自分のあるべき本当の姿にめぐり会ったのである。このめぐり会った唯一つの証拠は、それが楽しいということである。速く泳ぐこともできる。無駄な力みや見てくれや小理屈を捨て去って、水と人間が生でぶつかって、微妙な・揺るがすことのできない法則にまで、探り当てた時に、肉体はその法則のもつ隅々までの数字を一瞬で計算し尽くし、その法則の持つ構成のすばらしさを、筋・血・呼吸で計り取り・築き上げ、その持つ調和（ハーモニー、響きあい）を全身で味わう。指先から足までの全体の動きで、全身が響き合っているのである。これが分かったとき、これまでの自分は、他人みたいのもので、自分が本当の自分にめぐり会うと、そうなってくるのである。」

この二つの副教材には、充分に〈スポーツの固有価値〉や高橋の言う「人間のための原理」の体験の具体的な感覚が表現されていると見てよいだろう。こうした体験を一般には‘至高体験’と呼んでいる。学生達の多くは、このような体育的体験を語る文脈に出会ってきいてはいない。虫明や中井の文章のような、スポーツ参加における至高体験の提示によって、初めて学生達は、それぞれのスポーツ参加の過去の経験から、各自に体験されていた至高体験を想起し始める。そして、遂には水泳そのものの遂行中に、虫明・中井の言う至高体験を、疑似的なものも含めて、次々に経験するようになっていくのである。学生は、スポーツ的体験・体育的体験を言葉にする契機を与えられて、自らの経験を言語化できるようになったばかりでなく、機械的な運動課題の設定から、より自由な感覚的な課題の設定を可能にしていく状況が、多くのレポート

に報告されている。

高橋は、このような学生のレポートに接して、それまでとかく「泳げる vs 泳げない」「一生懸命・熱心 vs 無気力・不熱心」のように二項対立的な軸上に学生を評価してきたものが、表面的なものの評価に過ぎなかったことに気付かされたという。

安心立命と言う言葉があるが、泳げない者たちに先ず水と関わる最小限度の安全を保証する目的から、「力学的原理」を意識することで始められた高橋のプログラムは、中井や虫明の副教材を提供する段階に至って、その最終的な目的とした「人間のための原理」を自覚する迄になっている。以下、そのことを幾人かの学生のレポートから拾ってみよう。

#### 3-1-4. 学生のレポートに見る‘大学体育の達成性’の実例

■ (A君) 3年生で初めて水泳を選択したときは、初心者用のコースで、早く泳げるようになりたいと思いつつ、25mを往復していた。それが学期末に初めて深いところで、つまり50m泳いだ時に、気持ち良かった。プールの水がとても青く見え、底にユラメク光を美しいと思い、またその中に浮いている自分が妙な具合で、まるで水と自分しか存在しないかのような感覚だった。今でも泳ぐ度にそう感じる。また私は昔から運動が大の苦手で、体育の時間は“恐怖”であった。だから、その頃は、唯の水であり、しかも恐ろしいものだった。ところが水泳をして暫くした頃に、ある日突然泳ぐのが楽になった。何というか、下手は下手なりに少しは泳ぎのタイミングとカリズムのようなものを掴んだ気がした(これが技術の習得ということかな?)。そうすると泳ぐことが好きになり、水が自分に優しいと感じるようになった。そうなると今度は、もっと上手に泳ぎたい、もっと速く泳ぎたい、と思い、久し振りに何かに一生懸命になった。

すると同時に水は挑戦の対象になった。初めて登山をしたり、記録に挑む人の気持ちがあった気がした。

■ (B君) 私と水の関係は、弱者と強者との関係で、水は高い所から私を観察しているようだ。全てのスポーツと相性の悪い私にとって、スポーツ選手ほど羨ましい存在はない。オリンピック選手などは、もはや私の生きる世界を越えた、奇跡の人達である。彼らを見ていて思うことは、その人達を包む絶妙のバランスである。持って生まれた天性の才能、その才能にマッチした種目の選択、才能を限界以上に引き出そうとする指導者との出会い、科学的な理論・データに裏付けられた最高のトレーニング、そして、その人を精神的に支える周囲の人々など、数えきれないほどの条件が限りなく揃って、初めてスポーツの美しさは誕生している。そこには、全てのものと調和した「奇跡の美しさ」がある。それが、水泳選手であるなら、水との調和が、一番保てるものこそ、勝者になれるのだと思う。

私と泳ぎを繋いでいるものは、「運」ではないだろうか、と思う時がある。泳いでいる時は、いつも怖い。「ここで水を飲んだら…」「ここでかくのをやめたら…」「ここで落ちるときに曲がったら…」と、悪いことばかり考える。全ては私の体でなく、水の「意志」にかかっているのである。水が私をほっておいたら、何事もなく泳いでいられる。しかし、水が私の泳ぎを認めてくれない日は、私のタイムも悪くなり、疲労も重い。早く水に認められる様な動きを掴んで、「美しさの表現」の域(枠)にまで行き着きたい。……。

この体育は、特に、スポーツは理論に裏付けられたものであることを、改めて気付かせてくれた。

■ (C君) 泳いでいる時、多くの人は、楽に浮いているような、力を抜いているような、

段々快い・すらっとした心持ちになれるようである。水の浮力は、不思議と人間を自由にするらしい。体の不自由な人や妊婦が水の中で生き生きとしている姿をテレビなどで観ていても、それは分かる。友達も水泳の時間は本当に楽しそうである。

ところが私は水泳が苦手。幼い頃の水に対する恐怖心がぬぐいきれず、未だ水の中で快い経験をしたことがない。その私が泳いでいる時に感じるのは、自分の体そのものである。水の中で、水によって、自分の目・耳・肺・手・足の存在、そしてその機能を実感する。体の全てが水中といういつもと違った状況の中で生きようと夢中になるのが分かる。水泳の得意な人とは一味違った一体感である。

水と私の関係はお互いを意識しすぎるのかもしれない。もっと力を抜いて、水の中で自分を自由にするにはもう少し時間がかかるかもしれないが、私も早く快い体験をしてみたい。

■ (D君) 私は水が好きである。特に水の中が好きである。水泳もやれば、スキューバダイビングもやるが、それらを始めようとした動機は、単純に水が好きだったからである。水の中に、自分の体を浮かせるのが好きなのだ。泳ぐわけでも潜るわけでもなく、何もしないで7時間半プールに浸かっていたこともある。しかし、何故なのだろう。何故そんなに水が好きなのか。

難しいことを考えれば、恐らく胎内回帰ということになるのだろう。母親の胎内で羊水に浮かんでいた時の記憶が、今も未だ残っているのに違いない。しかもその記憶は、細胞の一つ一つが覚えているのである。大脳から引き出される言語化できる記憶とは別のものではないかと思う。そして、それは、本能と呼んでも差し支えないものではないだろうか。

本能と書いたが、本能は不安や危機感から

導きだされることが多いと思う。食物や睡眠を欲するのも、体を維持するために危機感を感じた現れである。そして、その危機感や不安を解消するための手段として本能が働く。私はそのように考える。とすれば、私が水を欲するのは、年月を経ることにより、胎内より次第に遠ざかっていくことから生じる不安を消すために、本能が働くからなのか。もしかしたら、それよりさらに前、つまり、人類が生まれるずっと前、未だ魚類だったころを忘れつつあることから生じる不安なのかもしれない。

私達は、その昔、確かに魚だったのだろう。そう思える瞬間が確かにある。

私はあまり泳ぎはうまくないが、100m、200mと泳ぐうちに、2mや3mは「あっ」と思う位からだに水に馴染み、スウッと泳げることがある。そういう時私は、何とも言えない気持ちになれる。それは単に泳ぎが上達したことに対する喜びではない。何かもっと、もっと大きく幸せになれるのだ。本当に、言葉にしようがないが、恐らく、その瞬間こそが不安を解消された瞬間であり、自身の体内にインプットされている魚だった頃の記憶が、呼び起こされる瞬間なのだと思うのである。

私は走ることも好きで、ランニングもするが、これも水泳に通じるところがある。それは自分の鼓動と呼吸を意識できることである。ある小説で、自閉症の幼児の治療に人間の心臓の音を用いる場面があった。唯聞かせるのではなく、複雑な装置を使い、胎児が母親の心音を聞いている状態に近付ける。音だけでなく、もちろんそれを聞く部屋にも様々な工夫がされているのだ。その音を聞いているうちに、患者は眠りに落ちていくのだが、心音を聞きながらの眠りは、絶対的な至福感に満たされたものだという。小説だから、実際の医学的真偽には疑問が残るが、心音の効果には、私も感ずるところがあった。それがランニングと水泳なのである。ランニングは、足

が着地する時の振動と共に自分の呼吸がリズムカルに伝わってくる。水泳は水を透過した呼吸音が気泡と共に体に触れる。胎内の音ももたらす至福感。もしかしたら私の本能が追い求めているのはこれなのかもしれない。最も原始から存在し、体の隅々が知っているもの、水の中は私にそういった、言ってみれば野性のようなものを覚えさせるのだろうか。

私は、プールで泳いでいる時には、何も考えていない。頭の中は空っぽで、何m泳いだのかも忘れそうな位である。水に浮かんでいる時、かんじるのは、「気持ちいい」、それだけである。特に足の立たないような深いところで、澄んだ水を見ながら泳いでいると、水の表面を泳いでいるにも拘らず、深海魚になったような気分で、まるで、海の底をゆらゆらと泳いでいるような気になる。これは水族館の水槽の中を泳いでいる、美しい魚達を見ているとき感じるものにも似ているかもしれない。私は水族館が大好きで、子供たちが喜んでみている中に混じって、魚を見ている。魚自体の美しさよりも、ずっと水の中を泳いでられる魚は、とても気持ちよさそうなのが、羨ましい。

A～D君の4例でみるレポートからは、いずれの水泳体験も、水に絡む恐怖や不安を出発にして開始されていることを知ることができる。これが水との関係を深める中で、次第に解消されて、水との詩的な関係にまで快感情が醸成されていることが語られている。しかしここで注目しなければならないのは、中井や虫明の教授資料の媒介によって、水と関係する体験の記述的な表現のある種の可能性を見せられた学生が、単に情緒的な水との経験を詩的に語るだけでなく、彼らの有する学識を仲介させた体験の意識化が語られていることであろう。そこに、体育を経験している受容の水準が‘大学’におけるものになっていることを知ることができる。浮ける・呼吸でき

る・浮き沈みのリズムを習得する…こうしたことが、単に物理的な理解によって直接達成されたものであるのかどうかを即断することはできない。しかし、記述の多くは、生物学的でもある死への恐怖からの解放の上に立った達成であることを、少なからず語っていることがわかる。

ある技能の習得の経験が、高橋の浮力の説明や中井や虫明の言説を媒介したこと等によって、与えられた言葉を単に反芻するだけでなく、いっそう深められ・言説化されて、学生個人の経験を基にした言葉に換えられているのである。‘大学らしい’と言うのは、このことであり、それは例えば‘胎内回帰’であったり、‘奇跡の美’あるいは‘自由’であったりする、言葉で語ることの水準の問題なのである。

語ることの問題について、二つのレポートの次の部分が注目される。

▼水の中で、水によって、自分の目・耳・肺・手・足の存在、そしてその機能を実感する。

▼胎内で羊水に浮かんでいた時の記憶が、今も未だ残っているのに違いない。しかもその記憶は、細胞の一つ一つが覚えているのである。大脳から引き出される言語化できる記憶とは別のものではないか……水泳は水を透過した呼吸音が気泡と共に体に触れる。胎内の音ももたらす至福感。

こうした記述内容そのものが、大学における水泳指導の方法において、新たに注目すべき大きな可能性を示唆してくれているのである。次には、このことを高橋のバタフライ指導プログラムとの関係で考えてみたい。

3-1-5. 新しい達成としての‘大学体育らしさ’のさらなる経験について  
初心者運動は、意識的な経験として、四

肢がばらばらなものとして経験されている。「水の中で、水によって、自分の目・耳・肺・手・足の存在、そしてその機能を実感する」とする記述は、水中での自分という存在が「水（プールという状況も容れて）」や「泳ぐという文化」の中でまず分断されている、部分的な存在として感覚されている事を示している。これが、単に物理的に身体として浮いたり、運動によって推進したりすることを感覚し、それが機械的に達成されることを知覚しているだけでなく、泳ぐ者を包む「水」や「泳ぐという文化」という全体的なものが、やがてその全体的である存在性との関係において、泳ぐ者を分断されたものとしてでなく、全体として回復させていっているのである。高橋はこのことを前述のように「我々が水中で泳ぐことが出来るのは、手足を一生懸命にかいたり、けったりするからだと思いがちだが、水中でゆったりと楽に泳ごうとする時には、その力の90%以上は水から受ける浮力という自然の力の働きによるものであることを知る。」と述べているが、泳ぐことが人の work によるものでなく、その力の90%以上を他から得ていることを伝えようとしたものだともてよいだらう。

勿論、泳ぐことを意識して泳ぎ始める時、泳ぎ方を意識するにせよ・水を意識するにせよ、意識するという働きである以上、当然対象（存在性）が個々に切り出されている状態にあることはどうしても避けられないことで（意識するとは対象を個別化することであるから、分断は必然的な結果である）、泳げるようになるとは、意識が泳ぐことを成立させる全ての条件の全体に及ぶのでなく、むしろ分断を余儀なくする意識化の過程から泳ぐ者を解放することによって達成されるものであらう。

こう考えてくると物理的な認識がよく泳ぐことを導くのではなく、その意識化の過程を別途、詩的な言葉等で意識的に昇華させるこ

とによって、部分的である経験を全体へと回復していくのである。それは「水」との全体的な関係を達成するだけでなく、「泳ぐ文化」の全体に対して自分の位置を確立したことを意味しているのである。詳しい論述はここでは避けるが、スポーツに習熟することは、そのスポーツにおけるあるハビトゥスを獲得することだと言ったピエール・ブルジュの言説も、こうした解釈の内に含まれるものであらう。この時に学生は「大学生らしく」泳ぐことを達成し、快感情を経験するのである。それは泳ごうとする者が、泳ごうとして泳げるようになることを経験することだけでなく、「水」や「泳ぐという文化」が「新たに泳ぐ者を泳がしてくれていること」を知る過程であるとも言えるのである。

このように考えてくると、こうした気付きは、アメリカの生態心理学者：ジェームス・J・ギブソンのいう〈アフォーダンス affordance〉の概念に近いことがわかる。佐々木はアフォーダンスを「潜在する意味」〈佐々木正人『知性はどこに生まれるか』64ページ、講談社現代新書、1996年）であるとし、「何かをしようとしている動物によって利用されている物の性質」だ、としている（佐々木正人・他『アフォーダンス』190ページ、青土社、1997年）。佐々木らの語るアフォーダンスの概念を借りれば、高橋の毛虫段階のバクフライは、手と足が生み出す四つの起源からなる同心円の「ドボン・ドボン」の音と波紋の交錯が、空気中と水中に位置する泳ぐ者の位置をその中央に定位させるアフォーダンスとなるといえるだろう。高橋のプログラムは、初心者が水の中でこのアフォーダンスをいっそう発展的に捉えていくように、構成されていることがわかる。ここから、私達は、物との関係と同じように「泳ぐ文化」の環境条件に対しても、ある種のアフォーダンスを捉えて行かなければならないことに気付く。私達は、物理的であっ

たり、生物的であったりする環境との対応関係に距離感を形成しつつ位置付くばかりでなく、文化的な環境に対しても距離感を形成しつつ位置付かなければならないのである。高橋が補助教材として配布した中井や虫明の言説は、こうした文化アフォーダンス（仮称）獲得への優れた動機を与えているといえる。

高橋の水泳指導におけるプログラムとその指導法は、以上のように、大学の体育を具体化する幾つかの視点を示唆している、と言うことができるだろう。

### 3-2. 第2部：スポーツをくみること〉の意味の指導について

#### 3-2-1. くみること〉の前提としてのく知ること〉の学習

アフォーダンスを探るシステムに注目した佐々木は、〈運動のオリジナル〉と言う概念に行き着いている。草の根が、ミミズが、その運動のために、ある運動のオリジナルを有しているというのである。彼はそのオリジナルの性格を「どの部分も回っている」と表現している。もう一度、高橋のバタフライ泳法の指導プログラムに戻ろう。高橋は、このプログラムの「毛虫段階」から「さなぎ段階」への移行のキーポイントになるのは「水面上に手を出す前に水を sweep する動作を行う」ことだとしている。この sweep するという動作が、次への適応を探索し、誘導する基本的な運動となる。人の体は、骨が関節で接続された多関節系の鎖、即ち〈運動する鎖：運動鎖〉の形状を基本形態として、構成されている。この運動鎖は運動に際して、その末端が、運動中心の運動方向に対して一端逆向きの運動、いわゆる lagging back 現象を生じることで知られている。バタフライの泳法においても腕をスイングする限りにおいてこの現象は必然的に生じる。当初、手で水を sweep していた動作は、やがて前腕・上腕・肩帯の参加を得て、大きな運動へと発展し、運動の中心から

運動の末端へ順次運動が送られる運動のある経過が発現するだろう。この時、運動に参加するどの部位も全体の運動に方向づけられながら、なお固有の運動を発現する契機を有している。その運動を合目的な運動に joint するのが「どの部分も回っている」ことによる同調なのである。「水」と「文化」へのアフォーダンスを探るシステムはこの「手で水を sweep する」運動（回っている運動）にその起源を持つことになる。結果として成立しているバタフライ運動の形態的経過を観察して、この運動の origin に辿り着くことは至難であろう。しかし、この知を所有する者にとっては、バタフライ泳法を観る着眼点の第1が、まさにこの「手で水を sweep する」運動に他ならないことが分かる。バタフライ泳法の観察・評価は、この「手で水を sweep する」運動を観ることから始まる、としても過言ではないだろう。

以上のことが、スポーツをくすることくみること〉がく知ること〉の前提であると単純には決めつけられない所以である。そこで、ここでは、スポーツを観ることが、一つの教養訓練を要するものであることを問題にしてみたい。

#### 3-2-1. くみる〉前提としてのく知ること〉の学習の指導

平成12年12月、体育センターのFDセミナーの一環として、体育センターの有志が集まり、「共通体育の2年次生に与える講義について」考える会が催された。会を主宰した田崎健太郎は、「体育・スポーツをめぐる問題」を次のように指摘し、これを受けて大学体育が担うべき課題を問うたのである。

- 1) 学生は体育的活動に「楽しさ」を求めるが、「楽しさ」の質（内容）を理解しておらず、「楽しさ」を実現する方法を持たない。
- 2) 「価値が多様化」する社会的背景の中で、「自己の価値」に基づいて行動しようとする

が、‘他者の価値観’を受容しない傾向にある。

- 3) 教授する側も受講する側も‘生涯スポーツ’を標榜しながら、‘スポーツの’‘スポーツによる’価値に深く気付いていない。

田崎は、今体育センターにおいて‘大学体育’が課題とすべき点は、以下の3点であるとした。

- 1) 各科目を通して個々の教官が、各自の教授の自由性を越えた、大学体育全体としての目的を共有することを求められているのではないか。
- 2) 兎角スポーツ文化の享受だけが強調されるが、創造・継承するという視点も重要ではないか。
- 3) 以上の課題を実現するために、実技とそれに合わせた理論的説明によるだけでなく、より広範な内容の演習や講義による知的な学習を加えた、両面からの教育が必要ではないか。

こうして、この会は2年次生の講義に際して、講義を担当する者に対して‘生涯スポーツ’‘教養・文化’‘文化論的アプローチ’をキーワードとした共通の内容を設定することを求めることで、ほぼ合意した。これらの内容的な要求に対し、嵯峨は、改めて「大学体育が、スポーツに関わる質的な態度の向上のために、身体的な諸能力の開発・享受にとどまらずに、感性的（デュオニソスの関与）・理性的（アポロンの関与）諸能力の開発・享受へ向けた教育である」ように求め、「〈スポーツをみる〉ことが、実践知の獲得にも貢献すること」「〈スポーツをみる〉ことは、学生の関心の対象を取り上げやすく、また学際的なアプローチも可能である」ことが指摘され、講義を〈スポーツをみる〉資質の開発に向けられたものにするすることで、ほぼ了承されたのである。講義担当者は、田崎・嵯峨・阿部・松田（松田義

幸：実践女子大学教授）とされた。

さらに、〈スポーツをみる〉ことの価値について、スポーツをみるのが、個人的レベルで問題にされる場合と社会的レベルで問題にされる場合のあることが議論された。前者で課題化されるのは「スポーツによる教養形成」と「スポーツのための教養形成」であり、後者で課題化されるのは、プレーヤーとオーディエンスの弁証法的な関係から生まれるスポーツ文化の創造であることを確認した。こうして、平成10年度の2年次生講義の課題は、次の二つになることが決定されたのである。

- 1) スポーツを〈みる〉ことにおける二つの価値のそれぞれの意義について
- 2) スポーツを〈みる〉ことの二つの価値の弁証法的な関係について

### 3-2-3. スポーツを〈みる〉ことを教授する

改めて、スポーツに関わるということを〈プレーする〉〈プレーをみる〉〈プレーする者とプレーをみる者を会わせる〉ことであると整理してみる。すると、指導者がスポーツへの関わり方を教えるということは、〈プレーを教える〉〈みることを教える〉〈コーディネートすることを教える〉ことだと言うことになる。私達は、よりよくスポーツをみるために、支援情報を必要とする。指導者はより良く見せるためにも・より良くプレーさせるためにも、質の良い支援情報を提供しなければならないことになる。ところで、支援情報は、私達の周りで、どのように提供されているのだろうか。

スポーツの情報は今日メディアの上に溢れている。とりわけ映像メディアや活字メディア（新聞等）の氾濫はすさまじい。しかも、それは質を弁えない。この時、このメディアの質を決めるのは、見る側の態度・能力であるということになる。よい情報の形成のためには、見る側に、個人の教養を形成していこ

うとする態度や動機、文化の創造に主体的・批判的に参加する態度や動機が、期待されることになる。プレーヤーが優れた情報の発信者・担い手でなければならないように、それを受ける受容者の態度もまた重要な意味を持つ。受け手もまた優れた批判精神と創造的な姿勢を保持していなければならないのである。

こうして、大学における体育の一つの課題とその水準が設定されることになる。このような要請を受けて、プレーヤーとメディアの相補的な関係を教授する、講義の内容が決定された。

第一段（第1週目）として私達は、サッカーの中田（嵯峨の担当「スポーツに於ける創造」）、スピードスケートの清水（田崎の担当「動く広告塔」）、スキー・ジャンプの原田（阿部の担当「ヒーローの条件」）を取り上げ、彼らがファンやマスコミとどのように関係を形成しているかを考察してみることにした。一人20分間程の講義からなる3人のオムニバス形式でのプレゼンテーションを計画したのである。ここでは主として、ファンやマスコミと一体化するデュオニソスの興奮の原田と、マスコミの質の悪さに対峙する中田、マスコミをスケート興隆の力にしようとする清水が、アポロ的な存在として対比的に構図化され、対置されている。

第二段（第2週目）は、そうした対立を弁証法的に止揚するような、メディアに現れるいっそうソフィステケイトされたスポーツの象徴性を紹介することにした。スポーツを象徴するものに迫るものとして、嵯峨は「NIKEの志向するもの」を、田崎は「録画編集されたツール・ド・フランスとヨーロッパのクラブ・アクティビター」を、松田は「スポーツをく見る」欲び」を選択・構成し、それぞれについて60分間ずつ語ることが用意されたのである。

### 3-2-4. 阿部の講義をたどる

以上の経緯と決定を受けて、以下は一例として、阿部の講義に至る準備について検証してみる。阿部は、講義に三つの意味のレベルが必要だと考えた。

- 1) 情報伝達のレベル：スポーツに参加していることの具体的な背景・経緯・装置（メディアとの関係など）・役員・ファン・ユニフォーム・運動等を伝達する。またそれらの関係やエピソードを伝達する。
- 2) 象徴的なものを伝達するレベル：上記の関係を読み解くキーワードや概念（指向対象となるシンボル）を与える。意味を成立させる〈物語〉を語る。象徴的な認識を可能にさせるより誇張・拡大された記号を与える。
- 3) 意味を読み取る契機を伝達するレベル：描写され、語られたものを越えて、語りたかったものを与えられるようにする。

第1のレベルについては、まず、ゲームのエクセレンスと興奮が伝えられる必要がある。次に、この感情を越えて、スポーツに参加することの構造が、オウディエンスである私達と、プレーヤーである原田の構造として把握されたかどうかが問われるだろう。そこには、有形無形に私達ファンを誘導するマスコミとの関係がある。これらを反省的に捉えることで、わが国のスポーツ構造の現状が見えてくる筈である。

第2のレベルからは、原田のヒーローとしての条件が意味的に解釈可能でなければならない。物語の筋（筋立て）のキーポイントが設定されなければならない。阿部は、NHKの実況中継のアナウンスを務めた工藤三郎のナレーションにプレーヤーとオウディエンスを結ぶ情緒的な契機を計算した。こうした条件にオウディエンスとして私達がどのように関わり、その関わりで増幅された原田への感情移入をどのように生きる価値に変えられるか、これが第3のレベルの問いである。この

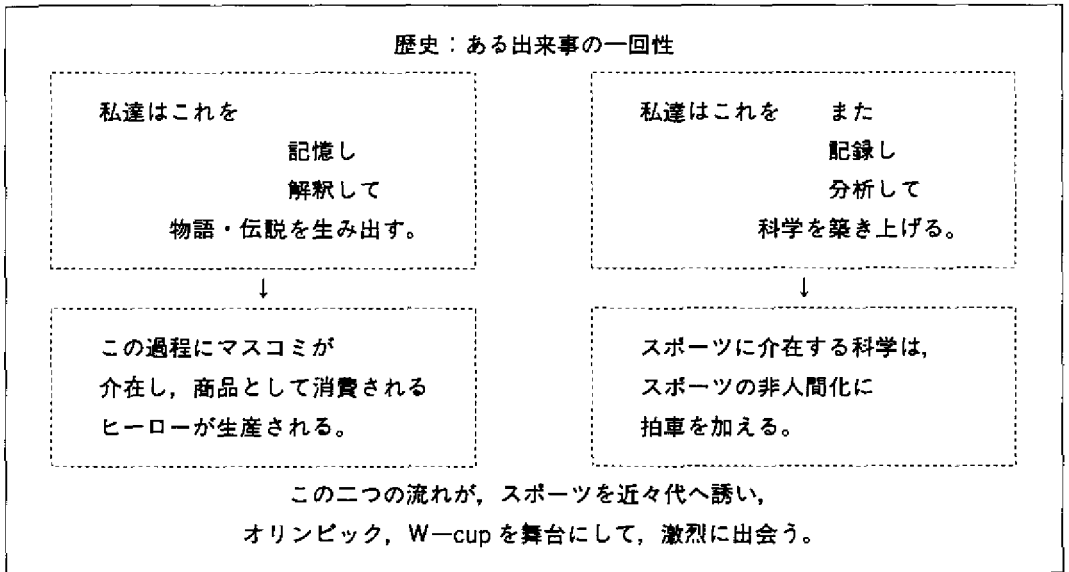


問については後述する。

阿部は、許された時間は20分であったが、時間オーバーを覚悟して、19分弱をリレハンメルの失敗ジャンプを含む映像としてVTRによる紹介に賭けた。語ることは教授する教員の資質に由来するが、他者が用意したVTRの紹介を授業内容とすることは、ある意味でそれ自体教授することの自殺行為につながりかねない。教授術としては選択に迷うところだったのである。映像の中心テーマは、失敗(実存的な死)～再生(家族の団欒)～長野での失敗ジャンプからの勝利へ、まるで運命に踊らされているような原田の人間性の発現においた。とりわけ、第3の意味を伝えるために、リレハンメルの失敗ジャンプの後に原田が自分探しの過程で‘自分の全体としての在り方’

に気付いていく家族との団欒シーンを、最重要であるとして、挿入したのである。VTRは、1998年3月7日に放映されたNHKの長野オリンピックのドキュメンタリー版『立て・立て・立った！原田雅彦、ヒーローの誕生』を縮小再構成したものを使い、特に、ナレーションはNHKのものが不自然に聞こえない形で、それをそのまま生かして使ったのである。

残された5分間で、第2のレベル、第3のレベルを解説することは、ほとんど至難に思われた。阿部は、第1回目の解説を5分間延長し、OHPを用意。次の内容だけをコメントした。学生の原田への好感を期待して、根岸康雄著『パパ、やったね！』の表紙を飾ったカット絵を背景に配した。



この出会いの衝撃に  
中田は黙り、キーボードを叩いて反抗し、抗議する。  
清水は、この出会いの力を己の立脚点として、  
走る広告塔と呼ばれ、これを利用する。そして、  
  
原田は、この衝撃の波の間に  
身を‘ノリ’に任せて浮かんでは、沈んでいく。

そんな原田に

「立て／立て／」と

祈りにまで近い気持を寄せるのは、

判官鼻風の日本人だからなのか

それとも、かくも激しく急転する彼の運命に

一人の人間が生きているということの真実を見て、

心底から励ましのメッセージを受けているからなのだろうか。

丁度自ら両の目を潰したオイディプス王が

己の‘娘で妹’であるアンティゴネーに救済され、

やがて、いっそう大きな救済を彼の愛する国にもたらしたように、

あの原田は、家族に癒され、家族に励まされて、

己が背負い、己が果たそうとした、あまりに重い勝負の

ステージに立ったのだ。

(a)(b)

そして、またも悲運に翻弄されたように失速し、

あの馬鹿ジャンプを見せてくれる。

渾身の落胆と失望から

歓喜へと解放されるまでの 団体戦30余分は我らにとっては地獄

それはまた 原田の4年を賭けた長い贖罪の時間であった。

- 原田の癒し : 家族が教えてくれる‘他の世界のこと’
  - : 許す仲間「銀メダルが取れましたよ」
  - : 失敗ジャンプの理由を知るコーチ陣
- 原田の脱線 : 「有名人の女房らしくやれ！」
  - : ノリと原田らしさ（ジャンプ技術と態度）
- 原田の贖罪 : 西方・葛西のウエアと手袋
  - : 金メダルへの思い
- 原田の夢 : “ジャンプといえば原田”と言われたい
  - : いつまでも大倉山で飛んでいたい

(b)

原田はファンやメディアをどう見ていたのか？

見えないファン・メディア……重圧（呵責・重圧・脅迫としての圧力、嘲笑的な負の力）

- 嫌がらせ・脅迫      家族を守る
- 失敗への批判      金メダルをとる覚悟と努力
- 中傷・誹謗・譴責      「ジャンプは原田」といわれる成績
- 期待 激励      「有名選手の妻なんだから」

目の前のファンとメディア……激励（一過性で、偶発的情動的で、直ぐに一体化する未分化な関係）

■試合会場のファン 万歳と一緒に盛り上がる【ノリを生む】

■カメラに向かって 笑顔とリップサービス【ノリを確認】

\*失敗の後で、「またやった…」と凭れ掛って足を投げ出す

(a)(b)

●ノリから孤立（自失）へ

●歓喜から放心へ：一体化された一喜一憂

「期待しているよ」「期待に応えるからね」

●安堵と勝利感の共有（「よかった…」で終わる危険性）

創造性を含まない、消費的な、前近代的関係

(a)(b)

■ ヒーロー達のもう一つの戦い（ヒーローの視線）

原田は、ファンやマス・メディアに何を見ていたか

今日本で、漸くスポーツ観戦の新しい仕組みが生まれようとしている

（例外；野球，相撲，競馬，競輪）

プレーヤーとファン&メディアの関係は、漸く始まったばかりだ

(a)(b)

第1回目の講義では、OHPの内容を解説しすぎて、思わぬ時間オーバーを来してしまった。特に原田のジャンプ技術を解説するために、幾つかの技術用語（てんぷらジャンプ，サツツ等）を導入してしまい、これを定義して解説するのに多くの時間を使ってしまったのである。そこで第2回目は、VTRを再編集して4分間縮小しただけでなく、(a)の箇所を省き、極力解説を入れないことにした。しかし、結果はVTRの縮小は成功したものの、解説は無味乾燥なものになってしまった。

第3回目には、何を学生に伝えたいのか、さらにテーマを明瞭にして絞らなければならなくなった。第2回目のOHPより、さらに(b)箇所をカットして講義に臨むことになる。しかし、アクシデントがあり、実際にはいっそう口述部分を短縮する必要に迫られたのである。実質5分間の猶予しかなかった。その結果、用意したOHPのゴシック部分を中心に口

述することになる。けれども、この短縮はむしろ他の講義を活かし、原田の部分についてもVTRを活かして、蛇足を省く結果になったようであった。

さて、語りたかったこと、つまり最も教授したかった意味内容は、どのように学生に伝えられたか、それを反省的に把握しなければならない。次には、学生に伝えられたものと教授しようとした課題と過程の間の関係を考えてみたい。そこに大学らしきの現われがある筈である。

### 3-2-4. 学生のレポートと教授のレポートについて

学生レポートに対する出題は「スポーツファンがスポーツの創造に参加するとはどういうことか」と言うものであった。これは、講義全体の狙いを第3のレベルにおいて問お

うとするものであった。すなわち、自分がスポーツと関わる三つの様態〈する者〉〈みる者〉〈つなぐ者(コーディネートする者)〉の関係を踏まえた上で、特に創造的な〈みる者〉であるように自覚して行く際の、役割の質を問うたものである。学生を対象にしたレポートの狙いは、講義の結果として、第3のレベルに学生の認識が達したかどうかにある。

そこで、学生から提出されたレポートを、以下のように四つのレベルで評価することが予定された。

- 1) のグループは、講義で行われたプレゼンテーションの一部あるいは全部を単純に反芻して、これに感動なり・疑問を投げるもの、つまり1のレベルでの意味の成立に終わったもの。
- 2) のグループは、プレゼンテーションされた事実を捉えて、それを自分や社会、歴史等の背景との間に持つであろう意味にまで言及できたもの、つまり第2のレベルにおいて意味を見つけたものである。
- 3) のグループは、上述したように自分をスポーツをみる者、あるいはスポーツファンの立場において、直接ゲームを観たとか、あるいはファンであることだけでなく、私達の毎日の生活の中で接点を持つ商品やマスコミその他のメディアとの関係を、どのように引き受けていくか・とりわけ主体的創造的に引き受けていくかを論じたもの、つまり第3のレベルの意味を捉えたもの。
- 4) のグループは、1)のレベルにも達していないもの。

およそその評価の結果は以下のようなものである。プレゼンテーションに用いられたエピソードの個性や話題性、ドラマ性が大きかったからであろうか、レポートの多くは、原田・中田・清水の一人ないし二人を捉えて、その感動を記述するものが多かった。第1のレベルで

意味が成立しているものが多かったのである。第2のレベル迄の記述は、中田を通して(特に中田のプレゼンテーションはマスコミとプレーヤー、それにファンを直接結ぶテーマとして強く語られていたこともあって)多くみられた(詳しくは別途発表の機会を持ちたい。)これらの結果を、教授の内容・技術と結んでさらにどのように教授の課題とするのか。そしてさらにその結果を次の授業の成果との関係でどのようにまとめていくのか。教育の課程で重要なのはここからの問題であり、教育研究としては、そこから教授レポートとし、まとめて行かなければならないのである。それが難しい。

実は、煩雑に入り込むこれらの結果を充分に大学の教育として評価・改善していく方途は、教授技術として、未だ解決されてはいないのである。これを単に統計的な数値の比較に置くことは易しい。付帯条件を独立変数に見立てて、いわゆる授業研究として解析することも、徒な時間と労力を頼めば、それも可能である。そしてそれはそれで、ある種の論文としての意味合いを持つこともある。

しかし、今、私達が手にしたいのは、学生が授業の結果としてどこまで何を把握し、どこに学生が主体的・創造的に授業に参加し、どのように授業の意味を成立させてきてくれたか、その反応である。それは単純に客観的であればよいのではない。むしろ、主観的であっても、記述されたものとしての現われが欲しいのである。本論の第1部においても、大学らしい体育を問うた視点はそこにあった。第1部では、これまで体育というものが伝統的に成立していたある習慣的な構造の中で、最もエキスパートな事例(実技の授業を対象にしているということ)を〈記述されたもの〉として解析することから、大学の授業にふさわしい水準の成立を検討してみたわけである。第2部では、従来の授業構造を越えて、新し

い課題を新しい方法でプレゼンテーションし、その結果として学生の変化をどこまで引き出したか、その反応を捉えようとしているのである。それが期待される大学という水準の、教授活動たりえているか。そこを問題にしたのである。

しかし、第3のレベル迄の達成を課題とし、このレベルにおいて学生をスポーツに関わらせることができるとすれば、それは正に大学の教養としてそれが、単に教育の最終課程にある故にでなく、教育の最高課程のものである故において、ふさわしいものとなることが期待されるわけである。この第3のレベルにある課題は、質的な意味合いを論じる問題であって、それを評価する教授レポートもまた質的なものを要求されるものになる。教授レポートの難しさはここにある。

私達が今、授業課題とした〈スポーツをみる〉能力の育成は、本論第1部の終わりに提起した〈仮称；文化アフォーダンス〉のような、微妙な関係や関係の関係を論じ・考察する力の育成を意味している。それは、予め用意された結果に向けて教授すれば達成されるというものではなく、教授の結果をどのようにもまた学生と共有し合うか、と言う問題でもあるのだ。それはあくまで、活動につながる知的な過程（動機づけられていくこと）なの

である。それは単に研究の過程とは違う。その過程をレポートすること、その過程における葛藤と工夫と選択の記述は、それが今最も求められている教授レポート作成の一つの技術、すなわちティーチング・ポートフォリオ（教育業績目録）の内容の大半を網羅することになるのではないだろうか。〈スポーツをみる〉能力の育成は、またその裏返しの問題として教育する私達に〈スポーツを教育することをみる〉能力を要求していることになる。その意味は深く、大きな力を必要とすることだろう。

---

本論は、体育センター課題研究「大学体育らしさの所在を、水泳を事例に探求する」の報告の一部である。この課題研究が狙った比較研究の部分は、別途報告の機会を得たいが、この研究を進めていくうちに、遂には問題が2年生講義やティーチング・ポートフォリオにまで底通・拡大していることを知った。したがって、本論は、この研究課題の序説的な意味と総論的な意味を持つものであるとしたい。

研究の機会を賜り、併せて御賛助下さった体育センターの教官各位に、衷心より感謝申し上げる次第である。